

名古屋城の水環境—本丸の排水環境について—

木村 有作

キーワード

本丸 暗渠水路 雨水排水 吐水口 石樋
自然浸透 土橋（橋台） 雨落溝 防火水槽

はじめに

現在、名古屋城本丸の雨水排水については、①下水管による排水、②既設の暗渠水路を用いての排水、③自然浸透の3通りの方法が考えられる。現在は①および③による排水が主になると考えられる。①については、下水管により直接城外（三之丸を経由）に排出されることになる。また、②については、現在機能していると認められるのは、本丸南二之門（現在は表二の門と呼称）土橋の西側と不明門土橋の東側の石樋吐水口2か所である。

本来、近世の名古屋城本丸には、雨水や雑排水の排水については、築城当初からの計画が存在したものと考えられる。御殿などの建物に付属する雨落溝や暗渠水路も、もともと排水設備として整備されていたものとする。

1 本丸御殿の排水施設について

—発掘調査の成果から—

本丸御殿の排水施設については、平成18年（2006）～平成20年（2008）にかけて行われた発掘調査（1～4次調査）で、一部の遺構について調査成果があった⁽¹⁾。

発掘調査の報告書の中で、市澤泰峰は「第5章まとめ」の中で、「第3節遺構との対応関係2、水路関係遺構との対応関係」として排水施設について考察している。市澤は『名古屋城離宮内全図』（名古屋城総合事務所蔵、明治時代後期）を参考に、実際の検出された遺構との比較検証を行い、以下のようにまとめる。

・近世に遡ると考えられる暗渠やマスなどの遺構を検出した。

・「全図」の水路などに関わる記載は明治36年（1903）頃までの状況を示しており、それらは一部貯水槽や井戸など新しい施設を含んでいたりと、近世の物に手を入れ改変を加えたりしているものの、基本的には近世以来の施設を利用している。

・土管のみが配された部分については「全図」に表現がなく、「全図」作成以降の改変であると考えられる。そして、改変の時期については大正4年（1915）の大正天皇ご大札に伴う行幸に際しての工事による可能性がある。

市澤が報告の中でまとめるように、近世特に築城期にさかのぼる可能性が高い排水施設遺構の発見が特筆される。特に、本丸西側石垣面に開口する暗渠水路を確認できたことは、築城当初の本丸排水計画を考える上で大きな成果と思われる。

2008 報告書やその他の知見から考えると、大正～昭和初期の離宮期後半の本丸御殿の雨水処理の経路は次のように推定される。

1 屋根から雨落溝に落ちる→2 雨落ち溝から下水管を通して「防火用水」へ集水される。
→3 オーバーフローした水および水槽底に設けられた排水弁から排水された水は、下水管を通して「集水枡」に集められる。→4 集水枡から暗渠水路へ流れ出し、内堀に開口した吐水口から排出される。→5 内堀底に自然浸透するか、未確認の排水施設によって水堀（御深井大堀）に排出される。

例えば、本丸御殿西端付近の雨水は、CおよびDの防火水槽に集められ、5の集水枡から4の近世（築城期造か）の暗渠水路を通して、Ⅲの吐水口から内堀の南西側へと排出されることになる。この場合5の集水枡はレンガ造の堅牢かつ機能美を備えたものであり、離宮期に作られたと考えられる。位置的には近世暗渠水路に

直結するため、もともとあった石造の枡を改造した可能性が高い。

本丸御殿に伴うと思われる暗渠水路のうち、20・21・22は切石造であり、15の暗渠水路に比べ、時期の下がる可能性が高い。平成21年度の旧二之丸東二之門の修理に先駆けての発掘調査で、切石造の同様の暗渠水路が発見されており、本丸東枡形と搦手馬出を結ぶ土橋の北側へ排水する経路が推定されている。時期は、近世後半から考えることができるが、土管が普及する以前の明治中頃の離宮整備に伴うとするのが妥当と思う。

2 本丸の排水システムを考える

名古屋城本丸には現在7か所の暗渠排水溝の「吐水口」が確認できる（図1、Ⅰ～Ⅶ）。

7か所のうち、Ⅰ～Ⅳの4か所は、本丸外周の石垣のほぼ中間の高さに、東西南北それぞれ1か所ずつ開口している。吐水口には「石樋」のような特別な設備はなく、石垣面に開口した、方形の空間である。石樋がないため排水は石垣上面を伝って流れることになる。

本丸西面の開口部は、縦・横70cmほどの方形であり、人ひとりが匍匐して進める程度の空間である。南面・東面の開口部も同程度の規模と思われる。一方、北面の開口部は外観のみでも明らかに大きめとわかり、本丸側集水枡はレンガ造であるため、近代期に改変された可能性が高い。

吐水口の残り3か所は、いずれも枡形に付随する土橋から石樋を用いるものである。石樋を利用した吐水口は城内の各所でみられ、石垣の観察などから時代的には新しいものであり、おそらく明治時代以降に下るものと思われる。

3 本丸の排水と堀の関係について

—まとめにかえて—

名古屋城本丸の雨水は、自然浸透のほかに、暗渠水路を経て本丸周囲の「内堀」に排水される。

内堀は、主要部が立地する台地部を掘削して作られており、形状や出入水施設がみられないことなどから、築城当初から空堀として計画されたと考えられる。内堀は南枡形・東枡形・不明門の土橋（橋台）により3分割されている。内堀から外に向けての排水施設は本来計画されなかったものとする。外敵の侵入を助けるものになると考えるからである。現在、北側内堀には堀底近くから外の水堀に通じる暗渠水路が確認でき、レンガ造であることから、本丸北側の暗渠水路と同じ時期に新築されたものと推定される。

内堀の北西部では平成30年度から3か年にわたって主に石垣の安定性と安全性の確認を主目的としてトレンチ調査を行っている。その調査の中では、特に排水施設と推定できる遺構の発見はない。内堀は現在でも梅雨・台風など大規模降水の後で、北西部を中心に湛水状態がしばらく続く時期があり、一部ではかなり長い時間「水たまり」ができることがある。とはいえ、大半は空堀状態を保っており、自然浸透力の大きさを実感するのみである。

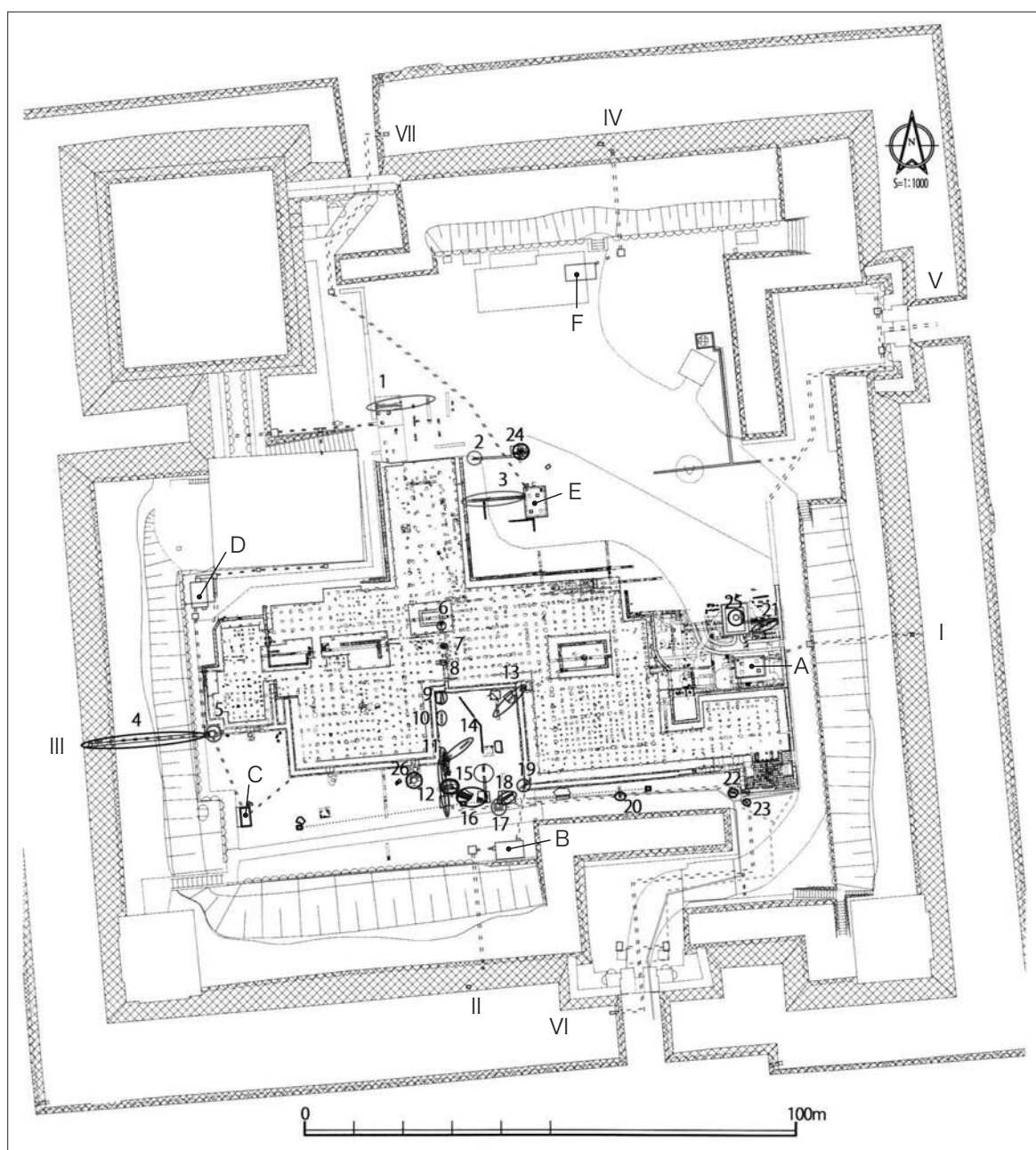
名古屋城本丸は、その北側を水堀（御深井大堀）、西・南・東は御深井丸・西之丸・二之丸によって囲まれている。さらにその周囲を囲む堀から、本丸内堀の垂直方向に堀を穿つことで、三つの大きな曲輪、さらに塩蔵構・大手馬出・搦手馬出といった小規模曲輪を区画し創り出している⁽²⁾。内堀とは細い土橋（橋台）で隔てられたのみであることから、この部分に内堀からの排水の工夫が施されているという推定も可能と考える。

註

(1) 名古屋市 2009『特別史跡名古屋城跡 本丸御殿跡発掘
調査報告書—第1・2・3・4次(2013)調査—』

(2) 現在、名古屋城内においてはこの細長い堀を「鵜の首」

という名称で紹介している。しかし、その呼称は『金城
温古録』などの古記録類には現れず、筆者は昭和後期に
なつての創作と考えている。



1: 雨落溝 2・3: 水路 4・15・16・20・22・23: 石組暗渠 (15は暗渠の中に土管を据える)
5・17: 石組枡 (5はレンガ、17はセメントによる改変を受ける) 6～15・18・19・21: 土管 24～26: 井戸

図1 本丸御殿発掘調査等により判明した排水関係施設 (註1の文献挿図に加筆)
(A～Fは、明治35年ころの防火水槽。I～VIIは、暗渠水路の吐出口。)

《Title》

Water environment of Nagoya Castle : Drainage environment of Honmaru

《Keyword》

The main enclosure of a castle, Underdrain or Culvert, Drainage of rainwater Spout, Stone gutter,
Natural penetlation, Earth - paved bridge, Rain ditch, Fire prevention water tank